

高野山紀行 @ ねんりんピック和歌山

辻 清治

仮完成版 Rev.2.04 (2022年8月14日 OB会 H.P への転載の為、前書き追加と共に文章量整え)

■ 高野山紀行と兵庫県チーム自戦記寄稿のきっかけ ～府大将棋部 HP 向け前書き～

次節以降の文章は、竜棋会 (*1) 会報誌 (VOL.18 2021年2月発行) に寄稿・掲載して頂いた文章を基にしています。竜棋会の役員や事務局の方々とは以前より親しくさせて頂いており、2019年秋開催のねんりんピック和歌山大会の数か月前、大澤事務局長より「ねんりんピックの将棋会場が高野町であることに合わせ、高野山紀行を書いてみませんか…」との打診がありました。将棋を趣味とする方々に紀行文だけで読ませる筆力はもちろんない(笑)ので「もし優勝したら…」と返答したことがこの文章誕生のきっかけです。

元々、文章を書くことは好きでした。1973年将棋ジャーナル誌 (*2) に正棋会の夏合宿の様子をレポートしたのが初寄稿です (*3)。その後、いくつかの観戦記や自戦記を月刊誌や会報誌や新聞 (*4) に掲載して頂き、それらの文章が印刷物として残っていることに感謝しています。

今となってはどの文章も懐かしく、朝夕1時間弱の通勤電車の車内で、何日も何日も膨大な時間を費やし推敲添削を繰り返したことさえ、懐かしく且つ楽しく思い出されます。

*1 : 菅井八段の後援会

*2 : アマチュア将棋連盟の機関誌。時期は正確ではないが、1970～80年代には月刊誌として市販されてもいた

*3 : 当時の正棋会会長の中西弘次さん(読売日本一決定戦 Best8、アマ名人戦等の大阪代表多数)と、当時既にアマ名人を2度(1967,69年)獲得されていた沖元二さんから要請があった。入会したばかりの私には、“No”の選択肢はもちろんなかった(笑) 沖さんは、後に読売日本一(1979年)・朝日アマ挑戦者(1985年・三番勝負敗退、初の大三冠ならず!)他の素晴らしい実績を挙げられたアマ棋界のレジェンド

*4 : 第29期女流王将戦▲岩根忍初段(25歳)△里見香奈1級(14歳)戦を2007年2月7～9日の3譜で日刊スポーツ紙に書かせて頂きました。その将棋は将棋世界の2021年9月号の付録「里見香奈の好手を学ぼう」の第1問として改めて取り上げられています。観戦記者として指し始めから盤側で観戦していた私は、仕掛け以降ずっと岩根さんが優勢と思い込んでいたのですが、第1問問題図6手前の▲8五桂は苦吟の表情での長考後の指し手でした。私には苦吟の理由が理解できず、長考を不思議に思っていました。そこから6手進み問題図になったところで初めて“打歩詰め”を伏線とした逃れ順に気付き、対局者お二人の読みの深さに感動したことを覚えています。上記付録がもしお手元があれば、ぜひ第1問に挑戦して頂ければ…と思います。

■ ねんりんピックとは…

ねんりんピックとは簡単に言えば60歳以上の国体です。年齢制限とスポーツ以外の文化交流系種目があるところに国体との違いがあり、今回は全27種目、選手・役員約1万人に及ぶ大規模な大会となっています。開催県が全国を巡って行くところも国体と似ています。将棋はその中の1種目で基本64チーム200名弱の選手数で行われています。将棋には「2年連続代表にはなれない」といった決まりがあり、69歳の私はここ10年で今回を含め5回の全国大会に参加してきました。全国大会のチーム成績は3位／2位／優勝／best16／優勝と前回は除けば満足のゆくものです。メンバーに恵まれた事が最も大きな要因と思っておりますが、事前準備が功を奏した面も大いにあり、事前準備のノウハウを次項で一部だけ公開します。

具体的な作業全部を公開し、ノウハウが多くの人に伝わると、兵庫県チームのアドバンテージがなくなり勝率の低下が予測されます。竜棋会の会報誌にはノウハウ全体を公開しましたが、本と電子情報では拡散の容易さや速度が違い過ぎて、リスクが高過ぎると判断しました。私のねんりんピック出場はたぶん1～2回で終わるはずで、自分自身への影響は少ないはずですが、しかし共に協力・努力してきたチームメイトに、近い将来大きな迷惑を掛けるかもしれないことは避けるべきと判断しました。申し訳ありませんが、ご容赦下さい。

【兵庫県チームのねんりんピック対策】 <第2項の大部分削除／代わりに第3項追加>

1. 戦うチームになる

代表になった後、選手同士顔を合わせる機会を作り、初出場の方に（宿舎・費用・交通・大会等）ねんりんピックの仕組みについて説明すると共に、チームの事前準備方針を説明し、対応（協力）を打診する。単なる個人の集まりでは各自のモチベーションの差を埋めることができず、どうしても低い水準に収斂しがちなので…

2. 対戦相手を分析する <この項では、具体的な分析作業の記載部分を削除しています>

相手の力や棋風や戦法選択を知ることは必ずアドバンテージになります。お試しを！

3. 事前準備を取り入れた経緯と効果

初出場時、親切で的確な副将の先達に恵まれ、上手く誘導して頂きました。ただ私自身はこの大会特有の各自の技術レベルの大きなバラツキに気付かず、油断から予選で一敗。ぎりぎり予選敗退は免れたものの、いらぬ危機を作り出してしまった【結果：3位】

二回目出場時は、三将の方の上位二人頼みの意識に違和感を覚えました。大将：レジェンド中平貴将さん、副将：私の二人が全勝で決勝まで進みましたが、三将の方は結局1-6。チームの意識高揚と事前準備の横展開の必要性を痛感しました【結果：準優勝】

この二つの敗戦を教訓に、第1, 2項で紹介した“ねんりんピック対策”を行うことにしました。（メンバーに恵まれたことが主要因ですが）上記対策も効果を発揮し、三、五回目出場時（三人合計で20勝1敗と18勝3敗）の優勝に結びついたと思っています。

■ 高野山紀行

大阪生まれの私は小五の林間学校を皮切りに三度高野山を訪れたことがある。いずれの時も涼しさと清々しさを満喫した。しかし記憶は何故か奥之院の参道とその奥にある燈籠堂（千年近く灯を絶やさず燃え続けている燈籠…）や弘法大師御廟の景色だけだ。大門の仁王像もうっすらと記憶にあるが確たるものではなく、高野山真言宗総本山の金剛峯寺も、印象的な根本大塔を持つ壇上伽藍の風景も記憶に残っていない。今回のねんりんピックが高野山で行われると知った時はうれしかった。寒さの心配はあったものの家から比較的近く（車で3時間）、もし早くに負け時間が余っても観て周りたい所がある地だったからだ。もちろん1局であろうとも負けたくないし、真剣に優勝を目指してもいた（特に2年前に best16 で苦杯を喫した滋賀県への雪辱は大きなモチベーションになっていた）。結果として観光は、大会前日早めに到着し、監督会議前に2時間程観て周った錦秋の壇上伽藍がすべてになった。チームメイトは高野山に足を踏み入れるのも初めてで、奥之院も見せてあげたかった。が、もし仮にどちらかひとつ選択出来たとしても彼等は観光より優勝を選ぶと思うので、結果は大満足だ。

我々の宿は高野山の中心近くに位置する別格本山西禅院という宿坊にとった。壇上伽藍はすぐそば、道向かい。大会会場の大師教会本部も徒歩5分の便利な場所だ。夕食の精進料理は部屋食で、若いお坊さんが運んできてくれる。ただ夕食は最も遅くしてもらっても17時半開始、風呂は21時消灯閉鎖。朝の早いお寺故の制限だが、大会第一日終了予定は16時40分。急いで戻ってもゆっくりする間もない。正直もう少し遅くして欲しいが本音だった。

建物は古いが適切に手入れがなされている。我々の部屋は8畳間が縦に3間連なった一階の部屋。障子を開けるとガラス戸の向こうには重森三玲作の枯山水の庭が広がっていた。三部屋は、主室・食事室・寝室と使い分けるようだ。どの部屋にもストーブか空調が備わっており、深まりつつある秋の夜も支障なく過ごせた。

朝5時半に目覚める。前夜から、寝坊しなければ朝のお勤めに参加するつもりだった。開始時刻6時半の10分程前、入口の扉が開いていたので本堂に入る。丁度若いお坊さんがひとり堂内のローソクにひとつひとつ灯りを灯していくところだった。薄暗い堂内に徐々に灯りが増していく。それにつれ磨かれた塗りの柱や扉に光が映る。本堂には他には誰も居ず、小さな足音以外は静寂が満たしている。お坊さんが奥の部屋に入っていく。その部屋にも灯りを灯すためだ。入っても問題ないと判断し私も付いて行く。その部屋は数十～数百の吊り燈籠（たぶん献燈）が吊るされ、その横に黒塗りの位牌のようなものが燈籠とほぼ同数吊るされた部屋だった。真偽は全く分からないが、そこは（弘法大師だけでなく）代々の西禅院のお坊様や檀家の方を祭っている部屋なのかもしれないと思った。

波のように繰り返されている小さな吊り燈籠の列、仏像や仏具の金色の光、炎の大きさや傾きが変化しながら繰り返される光と闇の揺らめき。仏教世界の美に何故か引き込ま

れ、うっとりとした。日本文化にどっぷり浸かって生きて来たことを自覚する一瞬だ。お坊さんが作業を終え本堂に戻られる。私もゆっくりと静かに戻る。まだ誰も宿泊客は来ていない。

堂内後方の板間には広い範囲に緋毛氈が敷かれている。その上に椅子が4、50席並べられ、中央付近のストーブが暖を放っている。緋毛氈の上に直接座ることは可能だが、座布団はなく、配置も椅子を勧めている。私はご本尊が正面に見える中央最前列の席に着いた。「正座や胡坐を好む人は少ないのか…、又は高齢者への配慮か…」と訝しがっているうち、次々と人が集まってくる。人が増えても厳かな雰囲気乱す者は誰もいない。凜としてはいるが、暖かで心地良い雰囲気が満ちている。後で知ったが、お勤めに参加した宿泊客は約30名。なんと、その9割弱が海外（主に欧米）の方だった。

短い挨拶の後、朝のお勤めが始まる。今朝、本堂でお勤めされるのは二僧だけ。私は無宗教だが、正確に言えば、八百万の神への自然な信仰心（自然崇拜？）はあり、神道にも仏教にもキリスト教にも全く抵抗がない宗教意識が低い人間だ。

読経が始まる。二人のお坊様の同調する声は長期間の鍛錬を感じさせる。自然と両親に想いが及び手を合わせる。中頃「焼香をお始め下さい」との案内。席の位置から私が最初なのが自然。ゆっくりと進み出る。焼香を行ったのは4～5名。上半身を床に投げ出す仕草（五体投地？）からチベット系と推測されたひとりの方を除き、全て日本の方だった。欧米の方が焼香に参加しないのは「英語の説明がなく、何のためのもので、どのように行えば良いのかわからないせいだろう。録音でもよいから英語の説明を流せばいいのに…」と初めのうちは思っていた。が突然、キリスト教が一神教であり、その教えを守っている可能性に気が付いた。

では何故わざわざ高野山を訪れ宿坊に泊まるのだろうか…？ 後半の読経の声は自らの思索の傍を流れてゆく。信仰心の乏しい自分もフランスからスペイン北部に連なる巡礼の道を歩きたいと思ったことがあるじゃないか…。盲目的な信仰者や原理主義者じゃない限り、異なる文化・異なる宗教の雰囲気にも魅かれるものを感じ、その文化を実体験したくなることもあるだろう。沢木耕太郎の“深夜特急”から感じられる異なる文化を体感することへの憧れ。塩野七生の“ローマ人の物語”に込められたひとつの主張「ローマ帝国など、征服者のリーダーの大事な資質のひとつは多様な信仰への寛容さだ」などに考えが及んだ頃お勤めが終わりを迎えた。

部屋に戻り出立の準備をする。大会に出かける少し前、部屋のガラス戸を開け放ち、縁側から庭と空を眺める。雨がすっかり上がった空の青、借景の山を彩る紅葉の木々、石庭の苔の緑、それら自然の持つ色それぞれが美しい。もっと前に気づき、ゆっくり庭を眺めている時間を作るべきだったと後悔した。

出立の時が来る。さあ勝負の時。決勝トーナメントに心を向ける。

■ 2019年ねりんピック 兵庫県チーム自戦記 ～事前準備実践編とその効果～

大会前に送られて来た予選の組合せ表と選手名簿から、私は今大会の厳しさを覚悟した。アマ名人戦などの県代表経験者がいるチームが少なくとも10以上ある。中には2～3名いるチームもいくつか…。さらにシニア名人戦の代表経験者になるとザラで(笑)、多過ぎて調べ切れなかった。たぶん半数を遥かに超えたチームにいる。全体のレベルが一段と上がったと感じた。

ただ前途の多難さを悲観して選手名簿を見ていた訳ではない。我々兵庫県チームも十分強く、確実に優勝候補の一角を占めているという自信はあった。相手チームの視点で見ると兵庫県は厄介なチームだ。穴がなく「ここでひとつ勝って、残りの2名であとひとつ」といった考え方が出来ない。私は自分も負けた2年前の滋賀県戦の苦杯を反省し「もし負けるとすれば、どこに?どんな風に?」といった視点でチェックしていった。その中で最も負ける可能性が高いと思ったチームは富山県だった。予選リーグで当たることがわかっていたので、副将の池田昌幸さんとも十分意見交換した。

予選1回戦の相手さいたま市も強豪輩出県の政令指定都市代表、十分警戒していた。

「接戦になる。自分が勝たなきゃいけない」と強く自分に言い聞かせて臨んだ。さいたま市の大将、大沼洋之さんとの一戦は予想通りギリギリの勝負となった。今回私の全7局のうち、自分の力は十分出せたと感じるのがこの一局だ。この将棋の棋譜が再現できないのは残念だし自分が情けない。その一戦を含め、今回は棋譜も図面もなしで、臨場感を感じられることを目標に言葉だけで語ってみる。

先手の私は居飛車を選択、対抗形となる。先手が船囲いを完成しても、後手は2筋を受けず、片美濃囲いと3二飛・2二角・3一銀・4一金型で待つ。▲2四歩△同歩▲同飛には△8八角成▲同銀△2二飛と対応し、▲2三歩△1二飛▲2二角△3二金▲3一角成△同金▲2二銀の強硬突破策には、フワリと打つ△5五角が好手で受かる。▲3一銀不成には△3三角打で、△8八角成と△2四角の飛車取りが残り、後手良し。石田流の基本定跡の応用だ。この順の急所は△5五角が打てることで、私は誘われていると感じながらも

(△5五角を消す)▲5六歩を突いてしまった。案の定、後手はすぐ角交換し2筋を受ける。先程突いた▲5六歩は「角交換に5筋を突くな」に反している。いずれ駒組みが進めば、△3九角など先手陣に角打ちのスキが多くなり、先手は駒組みに苦勞するはずだと後手は主張している。上手い序盤構想だ。気付いていたのについ安易な順を選び、その順に乗せられてしまった。私の中にはほんの少し甘い気持ちが残っていた。ハンディを背負ったことを自覚し、気持ちをさらに引き締めた。この後互いに片銀冠まで組み、▲6五歩と位を取り、▲6六角と自陣角を放つ。駒組み局面での勝負手だ。もしこの位置で角が安定できれば、前述の▲5六歩の欠陥を一気に消せるばかりではなく、後に後手の銀冠の急所に▲8四歩の楔を打ち込む狙いが残る。後手長考!先手作戦勝ちになれたかも…と思い始め

た頃、△5三角の好手で応えられる。前述の▲8四歩と同様に、先手の銀冠に対して後に△8六歩の急所の叩きを作っている。

ここからは6六角のポジションを巡る戦いが始まり、一進一退の玉頭の攻防が続く。時間を使ってギリギリ良くなりそうな手順を考え出し、一歩抜け出したと思ったことが何度かあった。が、相手も上手い対応を編み出し混戦から抜け出せない。何度喜びと失望を繰り返したろう…。こちらは残り10分弱、相手は5分弱で終盤に入っていく。優勢を確定できそうな気がするが読み切れない。と言うか読み切ったつもりの手もそれを帳消しにする私が見えなかった好手で返され、いつまで経っても勝利に近づけない。団体戦特有の極度の緊張の中、脳をフル回転させる。苦しみと陶酔と自分への叱咤が一度にやって来る。切れ負けルールで互角の終盤だと5分の時間差は大きい。それが私に幸いした。最終盤、際どく詰めろが掛かっていそうな局面に誘導し相手に手を渡す。相手に攻防の一手があればすぐにひっくり返る。後手も時間の少ない中、苦吟する。しかし、味の良い手がない。はっきりとした受けだけの手では勝ち目が無くなるので、なんとなく詰めろ逃れになっていそうな詰めで返して来た。私は残り時間の半分位を使って読み、敵玉に詰みがあると思えた時は嬉しかった。完全に読み切れた訳ではないが、この辺りで手を進めなければ、もし詰みに綻びがあった場合、今度はこちらが時間で焦ることになる。不安はあったが覚悟を決め、詰み（と思える）手順を進めた。5手後△7三同玉に5三の脱出路を消す▲6五桂と打ったところで大沼さんが投了してくれた。私より先に読み切れていたようだ。「力にまったく差はない。運が良かっただけ…」と心底感じた一局だった。

チームは予選1、2回戦を3-0、3-0で乗り切った。予想以上のスコア。3チームが2勝1敗の3すくみも起こり得ると思っていたが、2回戦で富山県がさいたま市を2-1で下し、その可能性も消えた。最後は予選抜けを賭けた2勝同士の勝負、富山県戦になった。富山県は前年の開催地。開催地チームのメンバーは特例で、複数チームの出場と前年・開催年・翌年の3年連続代表が許されており、今回出場の「おわら風の盆」チームは（メンバーの一部交替はあるものの）前年の富山大会の準優勝チーム。大将・副将の杉本千聡さん・桶谷光男さんはアマ名人戦など一般大会での富山県代表に何度もなっている強豪。三将の方の情報は得られなかったが、こちらの三将の木村文信さんは、兵庫県のアマ名人戦の地区代表（全8名/県）の実績が2度ある（「中央大会では2度とも池田さんに負かされた」と苦笑いと共に語ってくれた）。また今回のねりんピックの兵庫県代表3名を決める大会では、私とも予選と準決勝の二度戦っていて、その手応えから十分頼りになると分かっていた。朝、予選リーグ開始前、木村さんに「富山戦は勝負の一戦。上二人は1勝1敗になる可能性が高い。三将は緩まず戦い勝って欲しい」と伝えていた。奇数先（大将・三将先手）でその勝負が始まる。

杉本さんの対振り飛車戦略は変わっている。角道を開けず、振り飛車側の角のさばきを抑えることを主眼として序盤を組み立てられている。そこ迄の知識は得たものの、私の事

前準備（棋譜収集）が不足していて、三間飛車にはいずれ鳥指しのような引き角系の形になるのだろうと誤った想定をしていた。実際は居角のまま角道は開けず、2枚の銀を棒銀模様に進め、こちらの角頭に圧力をかける。その圧力をかわす為、角を5九方向に引いた時に初めて角道を開ける模様の取り方だった。私が菅井先生ならこちらを持って苦しむことはなかったろうが（笑）、センスのない私ではどう対処すべきか分からなかった。再び▲7七角と戻すのも手損なので居飛車の押さえ込みが成功しそうに思え、深く考えなかった。初めて対応する後手の戦略に、自ずとこちらばかりが時間を使う。それでも相手の小ミスを捉え、6筋に捌きの糸口を見つけた。4筋の突き捨てを先に入れてから6筋からさばきに出れば、少なくとも互角、たぶん先手が少し良い分かれが得られていたろう。しかし私は単にさばきに出た。4筋の突き捨てを先に入れると、後手は決戦の順を避け、4筋の得で6筋の損を受け入れるかもしれないと思ったからだ。が、欲張り過ぎた。後でも入ると思っていた4筋の突き捨ては、いざその局面でもう一度考えると、歩を突き捨てた瞬間、飛車に当てて強く受けに出る手があり、後手陣は非常に味の悪い形になるもののギリギリ耐えている。その局面は放棄するには未練のある局面でもう少し考えたかった。しかし残り時間の事を考え「駒損の攻めで切れる可能性が高い」の判断を受け入れ、勝負を先送りにした。ただ突き捨てを遅らせた判断ミスは大きく、後手の押さえ込みが成功した。以下の説明は省略するが、そのままノーチャンスの完敗となった。敗因を実力不足に求めるのは勿論正しい。が、改善に結びつく要素としては、事前準備が中途半端だった点を挙げたい。具体的には相手の序盤作戦及び棋風に対する誤解や理解不足が大きかった。この判断が正しいか否かは、次の対戦で証明するしかない。今回は残りふたりに望みを託す。

三将はこちらに分があるはず…との期待通り、木村さんは勝ってくれていた。貴重な勝利。この大会で三度連続のチームメイトになる副将の池田さんからは、高野山に移動する車中「今回は準備万端整えた。将棋の調子も最高！」との頼もしい言葉を聞いていた。これまでの大会では聞いたことのなかった強気の発言。2年前の滋賀県戦の1-2の敗戦は私のせいで副将戦を制した池田さんに全く責任はないが、チームの早期敗退自体が許せず、この大会期間中「今回は俺が引っ張る。どこにも負けはしない」といった気迫を周囲に漂わせていた。自身の言葉通り、元県代表同士の難しい一戦をものにしてくれた。私自身の負けがチームの致命傷にならず、チームメイトふたりに助けられたことを心から感謝した。

予選突破の16チームが明日の決勝トーナメントのくじを引く。私は8番を引く。隣の7番は予選を3-0、3-0、3-0で勝ち上がって来た神奈川県が引いた。このスコアはチームに穴がないことを物語っている。神奈川県は事前準備の段階でも有力チームとして捉えていたが、より手強さを感じた。ただ彼等もこのくじ運を嘆いた可能性はある（笑）

この夜の宿坊での様子は前段の「高野山紀行」で述べた。食事・風呂・早めの就寝と慌ただしく過ごし、翌朝は気持ち良く明けた。大会会場に着いてからもその流れは続く。決勝トーナメント1回戦の席、初対面でも同じ趣味を持ち同じ努力を続けて来た者同士の親しい

お喋りは心地よい。一般の全国大会より空気は明るく柔らかい。昨日もそうだったが、出場5回目になるとあちこちに以前の大会で親しくなった方がいて声がかかる。違和感なく大会に溶け込めている自分がうれしい。

私は20年位前、神奈川・東京に単身赴任していたことがある。神奈川県は将棋の盛んな土地で、あちこちの市や町で時期をずらしながら毎週のように大会が催されている。私も多くの大会に参加し、楽しませて頂いた。自分自身は忘れていたが神奈川チームの方から、その頃同じ大会に出ていたことを、私の方が少し強かったとのリップサービス込で教えて貰った(笑)。予選9-0の完璧スコアに話を振ると、大将の生駒隆典さんから「私は大したことないが、副将・三将は強力なチームです」との説明。大将戦の3-0は誰の仕業?(笑)ご自身の話は謙遜だが、残りは本音だ。将棋世界の棋界ニュースで優勝や上位入賞者として3人のお名前を見かける。また少なくとも副将の高木明さんは県代表経験者だ。

試合中盤、形勢は私が少し良いがまだ難しい戦いを続けている頃、副将戦が終わった。感想戦の雰囲気勝ちと判り、三将戦も既に終わっている様子なので、隣の池田さんに「2-0?」と聞く。「いや1-1」との返事。その声には「勝ってくれ!」の思いが滲んでいた。見えている手は決まれば鮮やかだが、読み抜けがあると逆転のリスクを背負う手だ。2-0なら踏み込もうと思っていたが、ここで長考出来るほどの時間の余裕はない。今のリードを維持する次善手(たぶん…)に方針を変更する。自分の将棋の良さは中盤にあると信じて、中盤戦を長く続けようとする選択だ。その後すぐ、相手に疑問手が出てリードが広がる。そのままリードを少しずつ広げ、(団体戦としては)理想的な形でゴールに飛び込めた。難敵を2-1で破りほっとする。神奈川は2年後の開催県。「2年後お待ちしております」と笑顔での歓迎表明。この大会に限らず、こういった気持ち良さ(ノーサイド精神)は全国大会の大きな魅力のひとつだ。私は帰宅の翌日すぐに、神奈川県の将棋種目開催地をネット検索し“愛川町”という町の名と位置を初めて知った。ただ兵庫県代表3名を決める大会はまだ1年先だ(笑)。この検索が無駄にならないようにしたい。

準々決勝は、福島県戦。実は事前調査の対象外としてしまったチームだ。チーム名が福島県全体を意味する名ではなく「郡山将棋クラブ」という地域限定の名になっていたのも、軽率にも県全体の選抜チームではないと判断してしまった。大会後調べてみると、小山田忠茂さん・湯田邦男さん・鈴木武一さんの3名の方ともシニア名人戦の代表経験があり、それも福島県のシニア代表は殆どその3人で回っていると言っても過言ではない方々だった。たぶんもっと探すともっと凄い実績が出て来そう。軽率な判断がチームの負けに結びつかず、2-1で勝ち進めたことに運を感じる。

準決勝は2年前に負かされた滋賀県。当たりたかった相手だ。こちらもだが、相手も勝ち進まない対戦は実現しない。準々決勝の和歌山A対滋賀県の戦いはどちらが勝つか判らないと思っていた。「ほぼ互角だが、わずかに和歌山Aの方が厚いのでは…」が池田さんの

見立てだった。滋賀はそこを勝ち抜いて来た。流石に県代表を3人揃えたチーム、勝負強い。私は結構自チームの勝利に自信があった。もちろん不安もあったのは確かだが、予想の中央値は、2.5-0.5位。3-0も有り得ると思っていた。後からは何でも言える類の強がり聞こえるかもしれないが、自信の根拠はふたつ。一つは十分な準備。私自身の敗因も改善策にも思い至っていた。二つ目は池田・松浦戦の圧倒的な相性のよさ。滋賀は2年前と同じオーダー。上ふたりで2勝の可能性はかなり高いと思っていた。経過は省略するが、3-0で雪辱。雪辱の喜びより、まだ一局残っているとの思いが強かった。

私は早い終局で感想戦も短かったので、2-0になった時点でもうひとつの準決勝、北九州市対福井県の偵察に出た。この2チームも事前調査ではマークを外してしまったチームだ。次回までに予測精度が悪かった原因を突き止め、修正しておく必要がある。さて戦況だが、私が見始めた時点では3局ともまだ対局中で、どちらが勝つのか私には判らない状態だった。ただよく見ると、副将戦は北九州市の日朝高晴さんの玉にほぼ必至がかかっている。形勢も、残り少ない持時間も自覚されているようだが指さない。残り2局に配慮し耐えている。持時間が切れるほんの少し前、相手がうっかり間違えれば詰む順に指し手を進め、正しい受けを見て投了された。また、大将戦は私には難しい終盤戦に見えたが、力丸俊二さんの鋭い寄せが決まり1-1。少し離れていて局面が見えなかった三将戦も北九州市瀧口弘己さんの勝ちで終わる。決勝戦に向け、私は心の中に「力丸さんの寄せは鋭い。終盤の競り合い時、要注意」の札を貼った。三将の瀧口さんとは数年前、この大会かシニア名人戦で対戦経験があり、確度の高い戦型予測が出来たので、木村さんにその内容を伝えた。

奇数先で決勝が始まる。大将戦は私が居飛車、力丸さんが四間飛車の対抗形だ。この1年くらい、対四間飛車には、私はエルモ囲い急戦を多く採用しているが、つい最近、将棋世界でその対策が特集されていたので避けた。また、▲5七銀右に後手は△3二金と応じたので、その手を疑問手にすべく▲6六歩と突き6筋位取りを目指す。6筋位取りを拒否する△6四歩に▲9七角△6二飛▲6五歩と仕掛けた。この仕掛けは普通△3二金が△8二玉などの後手玉周辺の手で代わっており、後手玉が8二玉7二銀型なら、本譜▲9七角に△6二飛▲6五歩△9五歩▲6四角△同飛▲同歩△9六歩で少し後手良しとの知識はあった。が、本局では△3二金が6筋の攻防には無駄な手になっており、△7二銀・7一玉形。普通とは中央の厚みが一手違う。正しく指せば「先手良し」になるはずと思い飛び込んだ。

準備していた局面ではなく未知の局面だったが、未知故に飛び込もうとした。結果論だが、肩の力を抜いて前向きな判断をしたことが、相手への圧力を増し望外な結果を生んだ。前述の▲6五歩以下、△同歩！▲5三角成△5二金右！▲8六馬と進んだのは驚き。先手が一挙に良くなった。この後、馬の力で9筋を▲9四歩△9二歩の形に押し込み有利を拡大した。後手玉は薄いまま。玉の安全度の差を埋める手段がなく、そのまま押し切れた。力丸さんも私も残り2局の趨勢が気になり、感想戦を簡単に終わらせる。隣を見ると難しい終盤戦。自然な順で池田玉に詰めろがかかるかもしれない順を見つけゾッとする。それが詰めろなら、

明確な一手負けの局面だ。池田さんへの信頼は厚いので、なんとかするのだろうとの前提で局面を考えるが、私にはその手段が分からない。少し気持ちが乱れたまま、三将戦を見に行く。この将棋も難しい。後で木村さんに聞くとこちらが良かった様だが、瀧口さんの中段玉にまだ生命力がある様に見え、私には判断がつかなかった。副将戦にまた戻る。三将戦を見ている間に局面は進んでいて、池田玉が危うい局面は過ぎ、日朝玉が寄るかどうかの局面になっている。互いに緊張が高まり、気持ちの余裕がないのが横から見ていても分かる。また局面自体も攻めと受けが相互に絡み合っている複雑な局面。急所の手を見抜くのが難しい。さらに数手進み、池田さんが角を打った時、その局面は飛車を切る順から入る詰めろになっていることに気付いた。日朝さんが受けの手を指すが、その手では詰みを消せてはいない。すぐ指すのかと思っていると池田さんが考え込む。それ迄、飛車を主軸に寄せを組み立てていたので、日朝さんも池田さんも盲点に入っている。さらにその局面は驚いた事に、(詰みがあるのに) 別な筋では受け難い詰めろを掛けるのも難しいという不思議な局面だ。そのまま数分見ていたが指さない。詰めろでも勝ちの局面になっていることが、余計に詰ます方向に考えが向かない原因になっている。池田さんはこんこんと(たぶん受け難い詰めろを) 考えている。盲点は深いと感じた。時間がまだ 10 分以上残っていることが頼りだ。私は一旦席をはずし、個人戦杉ブロック決勝の藤原雄三(大山名人からプロ入りを勧められたアマ棋界のレジェンドのひとり。竜棋会前会長) 対村石英雄戦を見に行く。途中、その準決勝で藤原さんに敗れた富山の杉本千聡さんに会う。「あんなに緩急自在な手を指す人に会った事がない」とあきれ顔に尊敬の混じった杉本さんの感想を聞く。ただ決勝の村石戦の局面は悪い。逆転が難しい局面を確認だけしてその場を離れる。自チーム席に戻ると、池田さんはまだ考えている。納得のいく迄考えようという姿勢なので、最低限勝ちを逃さないだろう…と思えたが、詰み以外の次善手は見えず、心配もした。飛車を切る順さえ考え始めれば、後は筋の手ばかり。1~2 秒で詰みにたどり着ける。さらに待つが、イライラハラハラが増す。ただ池田さんからは見えない斜め後方に立ち、他の方に疑われる様な仕草はしないよう気を付けた。その内、池田さんの表情が急に明るく変わる。詰みに気付いたのだ。そこからは最終確認の時間が 30 秒程あっただけ。暫くして三将戦の勝利も決まる。嬉しい時間だった。過去、力を十分発揮して下さったのに、私が負けて優勝の喜びを味わって貰えなかった 10 年前の武井滋さんと 2 年前の津崎澄男さんの二人の先達にも、この優勝の喜びが届けば良いのに…と思った。

今年の兵庫県チームの MVP は、文句なしで副将 7-0 の池田昌幸さんだ。チームを牽引した。副将で出場 3 回、通算 17 勝 1 敗、且つ 11 連勝継続中という素晴らしい成績だ。三将の木村さんも初出場で 5-2 の好成績。富山戦の勝利が優勝への道を切り開いた。

あと何年、私がこの大会に出られるかは分からない。しかし出る度、事前準備を怠らず優勝を目指したいと思っている。まずは 2 年後、神奈川大会で連覇を果たしたい。